

シベリア鉄道を通して「大国ロシア」を思う

近藤 節夫（会員）

一、変貌する「旧社会主義国ロシア」

「大国ロシア」は、【腐っても鯛】？である。埋蔵されたままの資源と埋もれた人智を、どうやって今日のロシア社会発展のために開発し、効率的に活かしていくのか。過去にあれば、華やかに花開いた文化・芸術・科学技術の才智を持ちながら、現代のロシア社会と市民生活の実態は、現地に足場を置いてみると世界からかなり遅れ、そのレベルも世界の水準を下回っているように思えない。

さて、一昨年（二〇〇二年）暮れシベリア鉄道全線（ウラジオストク・モスクワ間）九、二八八kmが電化された。地球一周約四分の一に相当する、世界一長い鉄道である。筆者はかねてより、茫漠な自然に触れられ、ロシアの人々とも時を共有することができ、「ロマン溢れるシベリア鉄道」に一度は乗ってみたいとの夢を抱いていたうえに、旧ソヴィエト連邦崩壊後の変貌した現代ロシア社会の実態も見てみたいと考え、昨年三月豪雪期のシベリア大陸を横断してみた。この旅行で特に印象深かったのは、①車中六泊の間、車窓風景はほとんど白樺林と雪原だった、②国際列車と銘打ちながら、言葉はキリル文字とロシア語以外まったく通用しなかった、③「一物一価」の原則の消滅、具体的には食堂車（前半三泊の「ロシア」号と後半三泊の「バイカル」号）の間にさえメニューに大きな価格差があった、④厳しい日常生活の反映か、素顔のロシア人にほ

とんど笑顔が見られなかった、⑤人命軽視が黙認・助長されていた、等であった。

社会主義体制が崩壊し、「六〇年安保闘争」さなかの学生時代に一時期傾倒した「マルキシズム」や、東西冷戦時代に訪れた東欧諸国の街角で体験した、社会主義の現象面についてのイメージが、大きく崩れていくのを今更のように実感させられた。

とりわけ驚かされたのは、社会主義のひとつの象徴であった③「一物一価」の原則が、国営列車内でも簡単に捨て去られていたことである。同時に、かつての社会主義国家が完全な社会福祉制度、福利厚生施設の充実や、個人の自由・平等・博愛、等を声高にプロパガンダして生命の尊さを訴えておきながら、実際には巷では⑤「人命軽視」の場面に直面して、市民生活の末端では社会主義の理想論は「きれいごと」にしかならないと改めて感じたことである。

③「一物一価」については、八〇年代後半のペレストロイカ時代に自由競争を認めた時点で、すでにその崩壊の兆候は表れていた。それは消費者物価の上昇にも表れ、庶民の生活は日に日に苦しくなっていた。

しかし、筆者が一九九二年にシベリアからサハリンを訪れた時には、まだ「一物一価」は厳然として存在していた。それが、この旅行中の食堂車ではきれいに消えていたのである。例えば、「ロシア」号のビール大瓶が二五R（ルーヴル、一R＝約四円）、ボトルシチ・スープが百Rに対して、「バイカル」号では、前者が三五R、後者が一二五Rで、

両者の間には大きな開きがあった。それにしても大学教授の平均月収が約二、〇〇〇R(約八千円)という現状から考えて、この食堂車の飲食は少々高すぎる。普通のロシア人乗客は携帯食と即席食品で自炊して、極力出費を抑えている。だからいつも食堂車が空いているのにも納得がいった。

⑤「人命軽視」については、近年発生したチエルノブイリ原発事故、原子力潜水艦沈没事件等の未熟な管理と対応に見られるように、国の統治能力や、現場の保守・管理システムに疑問を抱かせるような杜撰な大惨事が多発していることからもある程度予測はしていた。しかし、たまたまこの旅行中に体験した無神経で、刹那的なアクシデントから推しても、この国では東西冷戦時代以前から今日までの間、どれほど多くの陰惨な事件や事故が頻発し、隠蔽されてきたのか計り知れない。

二、気になる人命軽視と危機管理

この旅行で心底怖いと思ったことのひとつは、石油基地の町・チュメニ駅で危機一髪のカップリングを目のあたりにした時だった。

駅前広場でロシア兵に写真撮影を禁じられ、やむなく列車へ戻ってきた時のことだった。暫くして、遠くから警笛を鳴らしながらほかの列車が近づいて来た。ところが、その列車はなんの事前予告や警告もなく、そのまま「バイカル」号と駅ビルの間に停車してしまった。この闖入列車によって、駅ビルで時を過ごしていた若いロシア人カップルをはじめ多くの乗客が、「バイカル」号から隔てられ元の場所へ戻れなくなってしまった。辺りに乗客の安全を監視するべき駅係員を配置するわけでもなく、到着と発車の予告すらない無警戒ぶりと無神経さである。大事な乗客を列車の向こう側に隔離された「バイカル」号の女性車掌は、ただ慌てふためくばかりであった。その時、待ちきれ

なくなったのか、突然その若いカップルが手に手を取って無謀にも闖入列車の車両の下へ潜りこみ、這って通り抜けようとした。幸い列車は動かず、雪と涙塗れのカップルは無事に潜り抜けることができた。だが、もしこの時列車が動いたら、彼らは間違いなく黄泉の国へ旅立った筈である。かつて鉄道員として駅現場で安全管理に携わったことのある筆者は、こんな初歩的な安全対策をも無視するロシアの列車運行方式に対して、強い憤りと同時に、背筋の凍るような戦慄すら覚えたものである。

もうひとつ恐怖感に捉われたのは、モスクワ地下鉄の異常な高速化である。その高速ぶりは地下鉄の走行スピードではなく、駅構内エスカレーターの昇降速度と車両のドア閉鎖時の猛烈なダッシュである。通常日本のエスカレーター昇降のスピードが平均秒速1mであるのに比べ、モスクワ地下鉄のそれは、一・六mである。エスカレーターの終点近くでは、あまりの速さに転倒者が続出して、お年寄りや周囲の人に支えてもらってなんとか降りられるというありさまである。地下鉄のドアが閉まる時には、左右の戸袋から勢いよくドアが飛び出して、火花を散らすようにガツンとぶつかり合う。挟まれたら骨折どころか、骨が砕けてしまうほどの激しさだ。これでは簡便に利用できる市民の足が凶器と化してしまう。なぜこんな危険な状態を黙って放置しておくのか。ここには市民生活への優しいまなざしがあまりにも欠けている。このように公共施設の過度に危険で粗雑な扱いは、人命軽視以外の何者でもない。

世界に向かって人命の尊さを高らかに主唱しながら、実際には国の隅々ではこのように個人の生命や、健康を蔑ろにしてきたのが過去における社会主義国家の矛盾を孕んだ実態なのである。

三、ロシア国民は幸せだと感じている

か？

ロシアの国家成立基盤である、社会資本の整備と市民の生活実態は、大国と呼ぶにはいささか心もとない。少なくとも極東の地からヨーロッパまで、長い時間広大で無味乾燥な国土を厭きもせずじっと眺めていると、あるべき姿がおぼろげながら見えてくる。銀世界を坦々と走り続ける車窓から、時折点在する部落と肩を寄せ合うように固まった小さな家並みが目に入ってくる。シベリア地方特有の窓枠の小さな木造家屋からは、人の気配があまり伝わってこない。極寒の雪に埋もれ、家畜の姿も車もほとんど見られない。夕陽が落ちると仄かに洩れる家の明かりと煙突から煙が立ち昇るのどかな風景が、幽かに生活臭を感じさせる程度である。通過する小さな部落の辺りにはまるで活気が感じられない。まさに静寂で幻想的な世界である。

時折停車する大都会も騒がしい駅前を除けば、シベリア原野らしい不毛な街づくりで、工場の煙突からは二酸化炭素混じりの煙がもくもくと立ち昇っている。雪で泥まみれのバスや旧式のトラックが走っていたり、三々五々連れ立った歩行者の姿を見る以外は、特別目立つような風物詩もない。寒風吹きすさぶ中では子どもたちが国際列車を見学に来るような、発展途上国に見られがちな微笑ましい光景もない。そんな退屈で、けだるいようなムードを吹き飛ばしてくれるのは、列車内の地元の人々との心温まる交流であり、駅構内のつかの間のショッピングである。

物売りは駅によって売り方にルールや規制があるようで、列車の到着とともに売り子たちがどっとデッキに押し寄せ、乗客に自家製の「オームリ(ニシンの一種)の燻製」「ペリメニ(餃子)」等をわれ先がちに売ろうとする、したたかな自由がある一方で、プラットホームの指定場所にキチンと整列

させられ、大人しく販売させられている窮屈さもあり、これはこれでロシア的で面白かった。だが、見れば寒い中を立ちつくしている売り子はほとんどが高齢の女性で、彼らは旧ソ連時代に保障された「年金・恩給」の目減り分を、辛うじて内職で補っているようだった。国民が等しく自由で健全な社会生活を営むことができるという謳い文句で、福利厚生と老後を保障した社会主義の成れの果てがこのありさまである。果たして現在自由主義社会の一員となったロシア国民は、この現状をどう思っているだろうか？

四、ロシアの問題点と将来

ウラル山脈越えはあつけないものだった。広い国土も南北を縦に走るウラル山脈を超えると、欧米先進国並みの発展を享受している西側のヨーロッパへ入る。その西側と、立ち遅れている東側のアジア・シベリア方面との間には、経済成長とその成熟度において大きなギャップがある。

ロシアは過去において覇権主義によって領土を拡大してきたといえる。その自国領土拡大は無意識のうちに大国意識に陥る一方、脆弱な自主経済力と国家の軍事力優先のせいで、「大国ロシア」の維持と発展にとって重荷となり、経済成長の足を引っ張る要因にもなっている。開発の遅れている東側のシベリア方面を、ヨーロッパ領の欧米先進国並みのレベルにまで引き上げるには、現状では早くてもなお半世紀以上の時間を必要とするであろう。

社会主義・共産国家時代と比べ、恐怖政治、秘密主義、情報公開、規制緩和、思想の自由、宗教の自由等の面で大きく改善された反面、現象面で捉えれば事態が悪化の方向へ進んでいる面があるのも事実である。その中で現在ロシアにおける国民生活の三大懸案事項は、①治安、②経済・物価、③

年金問題、である。

本年五月第二次プーチン政権が発足した。秘密警察出身のプーチン大統領が、ロシア国民から圧倒的支持を得て再選された。だが率直に言って、あの強権派大統領プーチンが国民から全幅の信頼を得ているとはどうしても考えにくい。勘ぐれば、このロシア独特の大統領選出の方式、手順、システムと、プーチン圧勝劇の中にこそ、旧体制の密室的な暗黒部分と、「たてまえ」だけが表出する謎めいたカラクリが潜んでいる。この点にメスを入れなければ現状のプーチン体制は堅持され、結果的にロシア社会は少しも変わらない。

三つの懸案については、プーチン大統領は、事態を益々悪化させ問題化させている。①治安問題では、テロ撲滅を強調したチエチェン紛争鎮圧に見られるように、独立・民族派を武力でねじ伏せる一方で、マフィアやヤクザの跋扈を許し、治安は乱れ、社会不安を一層増幅させている。②経済・物価については、一部の金融資本家や新興石油成金と結託して彼らの台頭を許し、未成熟な社会基盤のうえに自由主義経済を導入し、国内総生産(GDP)は向上したが、結果的にインフレ、物価上昇、失業者増加、等により国民生活を苦境に追い込んでいく。③年金問題では、高齢者に対してなけなしの年金の目減りを拡大させ、年金生活者や高齢者に不安と心配の種を撒いている。このままではロシア国民は、とても将来にビジョンや、希望を持ってない。

現在先進国と称される国々の中でロシア人の平均寿命は驚くほど短い。社会不安、失業、生活苦、等で厭世観に捉われ、自殺者とアルコール中毒死亡者が激増しているのが、その最大原因であり、今日のロシアの社会不安を如実に象徴している。急激な社会体制の変革、目先の政治改革、思いつきの経済政策、等一連の国家施策と、プーチン大統領の個々の国民生活までは配慮し

ない、全体主義体制の安定化には、国民生活の将来の不安と同時に、ロシア似非資本主義の挫折がおぼろげながら予見できる。

おわりに筆者なりの勝手な独断と偏見を述べてみたい。この際ロシアはこれまで通り、ウラル山脈以西のヨーロッパ地域の経済発展を第一義的に考え、その一方で、思い切つてアジア・シベリア方面の開発は先進諸国の技術と支援に委ね、条件付で「国家開発特定地区」とでも位置づけして、外国に対して国土開発のための門戸を開いた方が、全ロシア経済復興にとっては即効的な経済効果が期待できる。例えば、国土が狭く経済力のある国々（例：日本、スイス、オランダ、ベルギー、韓国、シンガポール、台湾等）に対して土地と労働力を長期間貸与し、相互の知恵と債権国の技術と経済力によって、ロシア・シベリアの開発促進、経済発展を考えると、経済的に後進国のロシアが一日も早く先進国へ追いつく近道になり得ると思う。

余力のある労働力と豊富な自然資源を持ちながら、ロシアがこのまま余力のない自主経済力に依存して、ひとりの強圧的な大統領の指導力によって発展させていくのは、【百年河清を待つ】の類いで、ロシアのためにも、また世界経済発展のためにも決してプラスにはならないと考えている。